

I はじめに

今日、公共職業訓練は中高年者層の就業を援助する能力再開発訓練（以下「能開訓練」という）に重きをおきつつあるが、その歴史はいまだ浅く、訓練の運営にあたっては、従来の職業訓練の中心をなしてきた養成訓練によって得られた知識、経験の活用だけでは補いきれないさまざまな問題に当面している。しかし、今日までのところ、この知識、経験の不足を補うべく資料の蓄積は必ずしも十分でない。

本研究の主題は、公共職業訓練校において、現に能開訓練を受講している中高年者が能開訓練に何を期待しているか、また、能開訓練は中高年者の訓練ニーズをいかに満しているか等について、訓練生の分析をとおしてその実態の一端を明らかにしようとするものである。

具体的には、1. 訓練生の年齢、学歴、前職等を解明することにより、訓練生の全体像を把握すること、2. 職業訓練校入校にいたるまでの求職活動状況と、これをとおして中高年者を対象とする職業訓練制度の社会的周知の程度を明らかにすること、3. 中高年者の訓練受講の動機を明らかにすること、4. 受講中の訓練についての意識を明らかにすること。これは、(1)訓練科の選定 (2)訓練内容の難易に関する受講者の意識 (3)職業資格の取得に関する受講者の意識に分けられる。そして、5. 訓練修了近くの時点での職業選択意識と訓練受講結果に対する評価を明らかにすること、以上の5点である。ただし、5の評価に関しては、本調査の実施時点では訓練は終了しておらず、未就職の状態にあるため、訓練に対する評価は定かでないと思われる。しかし、訓練終了間際の就職決定状況、および評価意識を明らかにすることは、中高年者の就職決定のプロセス、あるいは受講の評価の時間的変化、そして変化におよぼす要因が何であるかを知る上で意味をもつものとなる。